新潮文庫

あした来る人

井上靖著

新潮社

あした来る人

定価190円

新潮文庫 草63 C

昭和三十六年七月十日 発行
昭和四十四年一月二十日 十一刷

著者 井上靖

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京二六〇局一一一一(大代)
振替 東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

㊞ 印刷・塚田印刷株式会社 製本・憲専堂製本所
© Yasushi Inoue 1961 Printed in Japan

新潮文庫

あした来る人

新潮社版

1501

目次

リュックサック……七
さくら……二八
耳飾り……五二
子犬……七六
黒い石……一〇〇
風……一二三
赤い夜空……一四五
初夏……一七二
霧……一九四
落葉松……二一二
さくらんぼ……二四〇

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

梅雨……二七〇
花火……二八五
条件……三一二
スキヤキ……三二八
うしお……三五四
汗……三七五
タマリスク……三九四
晩夏……四一二
訪問者……四三〇
灯の海……四四九
ヒマラヤの魚……四六八
赤いネクタイ……四八七
解説　山本健吉

あした来る人

リュックサック

列車が浜名湖の鉄橋にさしかかった時、曾根二郎は、後尾に近い三等車の一ぐうから腰を上げた。食堂車へ行くためである。

通路に立つと、彼は合外とうのボタンを外し、両手でズボンをずり上げながら、はみ出しているワイシャツをズボンの中に押し込み、それから大きい伸びを一つした。

長崎県の大村湾に沿った小さな漁村を出発したのは昨日の朝である。それから三十時間近く乗り物に乗りづめである。上半身が一枚の板のようになっているのもさして無理ではない。

浜名湖の湖面には春の陽が散っているが、湖面の色も、湖の流れ方も寒々としている。まだ冬の感じである。湖面の海への切り口に、白い波濤が、これも冷たく砕けている。

曾根二郎はちょっと考える風にしていたが、網だなの方へ手を伸ばして、重そうなリュックサックを降ろすと、それを肩にかけて歩き出そうとした。

「お降りなんですか」

声をかけたのは席がなくて通路に立っている中年の洋服の男である。彼は、曾根二郎が次の浜松の駅ででも降りると思ったらしい。それもそのはずである。彼の立った後には、彼の持物は一物も残っていない。外とうは着ているし、リュックは肩にしている。

「いいや、食堂へ行くんです」

そう言ってから気付いたように、
「かけていて下さい。構いませんよ。ぼくの居ない間、どうぞ、おかけ下さい。大変ですな旅は……」
曾根二郎は笑い顔を作った。その笑い顔がひどく人なつっこかった。彼は数え年で三十八歳だが、笑うか、口をきくかしないと、正確な年齢は現われない。黙っていると、その律儀な素ぼくな感じの顔はひどく老けてみえる。四十二、三と言っても通りそうだ。
曾根二郎が歩き出すと、その周囲の四五人の乗客の眼はいっせいに彼の背に注がれた。何となく周囲の人の視線を集めても、いっこうさしつかえないような多少とぼけた感じのものを、彼は身体のどこかにつけている。
曾根はぎっしり詰まって重そうなリュックを、右肩を少し上げて背負い、車の動揺に時々身体をふらつかせながら、幾つもの車両を通り抜けて行った。
食堂車には客が八分通り詰まっていた。
曾根は入口でゆっくりと内部を見渡した。そして空いている三つの席の中で、若い婦人客の前の席を選択した。窓際の二人むき合って腰かける席である。美人だなと思う。ただで美人の顔をながめられることに曾根二郎は満足だった。
その席へ行くと、彼はリュックをイスの横に置き、メニューを取り上げた。
「酒！　二本」
ビン詰一本で決して自分が満足しないことを彼はよく知っている。酒が運ばれて来ると、トンカツを頼んだ。脂っこいものが好きである。

曾根二郎は何年か振りで東海道の風景と、前に坐っている麗人を観賞しながら酒を飲もうと思った。

曾根二郎は、ビン詰の酒を、それについて来たガラスの小さいコップにあけて、それをぐびりと、口の中にほうりこむような特徴のある飲み方で飲みだした。

口の中へ一度に多量ほうりこむが、しかし、口にコップを運ぶ回数はそうひんぱんではない。飲み下すと、あとはちょっと下くちびるで上くちびるをなめ、ゆうゆう迫らぬ表情をして、視線を窓外に投げている。

そして時々は視線をむかい合っている女性に向ける。

美人である。——と言って、美人だと判定を下したのは食堂車にはいって来て、入口で一べつした際のことで、むかい合って坐ってからは、相手の顔へは一度も、視線を投げていない。もともと若い女性の顔を見ることは、曾根二郎は苦手である。

フォークとナイフを動かしている白い手と、格好のいい胸を包んでいる水色のスーツが、視野にはいると、曾根は身体を快適な情感が伝わって行くのを感ずる。これだけで充分である。どうせただだから、これ以上のものを望みはしない。

美人もいいが、窓外の景色もいい。

列車は浜松駅を出て海に近い田んぼの中を走っている。黄色い菜の花は三分咲きである。大根の畑と、三寸ほど伸びた麦畑とが、交替に眼にはいって来る。

五年間九州の田舎で暮したが、その間に一度も上京していない。久しぶりの東海道の風景である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「やがて、富士が見えて来ますな」
曾根二郎は、思わず口に出して言った。本当に彼は先刻から久しぶりで富士の姿を見るのを楽しみにしているのである。
向う側でフォークを動かしていた手が止まった。が、応答はなかった。紅貝のような色をしたみがかれたツメが、きゅうっとそこに力を集めた感じでフォークを押えている。と、それはやがてまた動き出した。
「酒を、もう一本」
曾根二郎は、振り返って、食堂ガールに命じた。
彼は酒を口に放り込むのも早かったが、料理を平らげるのも早かった。
静岡駅近くなった時、卓の上に三本の空ビンが並んだ。赤いツメはコーヒー茶わんを口に運んでいる。
曾根二郎は腰を上げた。もう少し飲みたかったが、倹約したのである。彼は机の端に、コショウビンで押えてあった伝票をつかむと、リュックを肩にしてカウンタアの方へ行った。きっかり三百円支払った。
アルコールの酔いも快適だったが、勘定の廉いことも快適だった。
廉い、廉いな！　何回かそのことを反すうしながら車両を三つか四つつっ切った。後尾の車両の自分の席にもどって来ると、リュックを網だなの上に載せた。彼の留守の間、彼の席に替って坐っていた人物が立ち上がった。その時、曾根二郎は、
「いいんです。そのまま腰かけていて下さい」

言うなり、今上げたばかりのリュックを網だなから降ろし、また食堂車へ引き返し出した。伝票を間違ったに違いないと思いついたからである。

酒三本とトンカツで三百円は廉すぎる！

伝票を間違えたとすると、相手は自分にむかい合って坐っていた女性である。彼女は三百円の料理を食べて、五百円近く支払ったかも知れない。

彼女は恐らく二等の乗客であろうから、探すにしても、たいしたことはないと曾根は思った。

彼はまたリュックを背負って、幾つかの車両をつっ切った。

食堂車には、もちろん、さっきの若い女性の姿はなかった。そこを抜けて特二の車室にはいると、曾根は左右に視線を投げながら、麗人の姿を探して行った。

三等車と比べると、室のふんいきがゆったりしている。立っている乗客は一人もない。みんな申し合せたようにイスを背後に寝せて、眼をつむっている。

曾根二郎には、二等の客がみんな、食後の満ち足りたうたたねをしているように見えた。

二つ目の特二の室へはいった。そしてその中程まで行った時、

そおれ、つかまえた！

口には出さなかったが、そんな気持だった。

彼女に違いなかった。二つ並んでいる席の通路側の方を取って、同じように身体を背後にもたせて、軽く眼をつむっている。曾根には彼女だけが、食後のうたたねの感じには見えず、めい想しているかのように見えた。

「もし」

声をかけたが、彼女は眼をあかなかった。
「ちょっとおたずねしますが――」
「は？」
驚いたように、眼を開けると、身を起した。きれいな顔をして驚きゃあがる！　曾根二郎は彼女の驚きに満足であった。
「先程は食堂で失礼しました。あわてて伝票を間違えやしなかったかと思うんです」
「は」
肯定とも否定とも受取れるあいまいな返事だった。
「ぼくは酒三本とトンカツを食べて三百円払いました。その時は廉いなと思って払ったんですが、あとで考えてみると、どうも、あなたの伝票ととっかえたのではないかと思うんです」
「は、あの――」
また彼女はあいまいに言った。年のころは三十ぐらい。美貌にも美貌だが、総体に上等の出来である。
「確か貴女は目玉か何か食べていましたな。それから何ですか、あれはビフテキですか」
「あの、よろしいんですの」
「よろしくはありません。幾らお払いになりました」
「でも、あの――」
ひどく小さい声で、相手は言った。自分も声を低くするから、曾根にも声を低くしてもらいたいと言った表情だった。大きい黒い眼がぬれているようである。曾根二郎は、その眼をのぞき込

んだ。網だなの一部がその黒い小さいレンズにくっきりと映っている。
曾根二郎は彼の生命から二番目に大切なリュックを通路に置いた。
曾根がリュックを通路に置いたのを見ると、婦人は、
「伝票が間違っていたのは存じて居りましたの。でも、たいした違いではありませんでしたので、そのままお払いしました」
と言った。到底釈放されそうもなかったので、ありのままに言ってしまおうといった面持ちだった。
「そうでしょう」
曾根は言って、
「幾らお払いになりました」
「四百二十円でしたかしら」
「そりゃあ、災難でしたね」
曾根は合オーバーのポケットから、むき出しのままはいっている紙幣と小銭をつかみ出すと、差額の百二十円を相手に渡した。
「よろしいんですのに――、すみませんでした」
「すまないのは、こっちです。ぼくの方が間違えたのですからね」
それから曾根は、通路をはさんで、婦人と隣り合っている席にだれもかけていないのを見ると、
「ここ空いていますか？」
ときいた。またリュックをかついで、もとの後尾の車両に引返すのにうんざりしたからである。

「空いております」
「じゃあ、ここへかわりましょう」
なんといっても二等車の方が快適だったし、もう東京まであと三時間足らずである。料金を支払うにしてもたいしたことはないと思った。
曾根はリュックを網だなの上に載せると、立ったまま煙草をポケットから取り出してくわえた。
座席へ腰を降ろして大分経ってからだった。
「あの、お荷物を持っていらっしゃらなくてよろしいんですか」
婦人が声をかけてきた。曾根があまりゆうゆうとしているので、心配になったのかも知れない。
「向うには何も置いてないんです。リュックは持って来てありますからね」
曾根が笑うと、同時にくすりと相手も笑った。
「おかしいですか？」
「いいえ、でも——」
それから婦人は、また軽い笑い声を出した。が、すぐそのあとで、失礼と思ったのか、
「本当は、リュックを大切そうに持ち歩いていらっしゃるからおかしいんです」
こんどは、おおっぴらに笑った。ひどく素直な感じだった。曾根二郎は苦笑して、
「大切そうにと言いますが、大切なんですよ。実際！」
その曾根の言葉が強く聞えたのか、
「あら！」
多少とまどった様子だったが、曾根はもう婦人の方を見なかった。

富士の山頂の一部が雲の間から見えている。ほんの少し見える青い空を背景に、雪におおわれた山頂の一部が、眼にしみるようにくっきりと浮び出ている。

隣りの麗人より富士の方がずっと美しい。やがて彼はイスの傾きを調節するボタンを発見すると、身体を背後にもたせた。

曾根二郎は他の人のように眠りにははいらなかった。網だなのリュックが気になっていたからである。

列車は六時二十五分に東京駅に着いた。曾根二郎は三十時間の乗り物の旅から解放されて東京駅のプラットホームに降り立った。

さすがに身体は疲れている。リュックサックの重みが、ずっしりと肩にくいこんでいる。

どこを見ても人間が多い。こんなに多くの人間が一体ここで毎日何をしているのか?! 入れかわりたちかわりはいって来る電車が、次々に人々をのみこみ、人々を吐き出している。

しばらく来なかった間に、東京というところは人間がやけに沢山集まった感じである。

曾根はホームをつっ切り、階段を降り、降車口から駅前の広場へ出る。ここも人である。人のほかにおびただしく自動車が密集している。

曾根は、しかし、五年ぶりの東京の玄関口の雑踏に押されたわけでない。気おくれする何ものもありはしない。

アリのようにしか見えない人間というものが、東京というところでは、少し哀れに思えただけのことである。

地下道をくぐって地上へ出ると、曾根二郎は丸ビルの建物を見上げ、ビルの中央入口の横手の

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com